

甲乙

泉鏡花

青空文庫

先刻は、小さな女中の案内で、雨の晴間を宿の畑へ、家内と葱を抜きに行った。……料理番に頼んで、晩にはこれで味噌汁を拵えて貰うつもりである。生玉子を割って、且つは吸ものにし、且つはおじやと言う、上等のライスカレエを手鍋で拵える。……腹ぐあいの悪い時だし、秋雨もこう毎日降っていて、そぞろ寒い晩にはこれが何より甘味。畑の次手に、目の覚めるような真紅な蓼の花と、かやつり草と、豆粒ほどな青い桔梗とを摘んで帰って、硝子杯を借りて卓子台に活けた。

……いま、また女中が、表二階の演技場で、万歳がはじまるから、と云って誘いに来た。——毎日雨ばかり続くから、宿でも浴客、就中、逗留客にたいくつさせまい心づかいであろう。

私はちようど寝ころんで、メリメエの、(チユルジス夫人)を読んでいた処だ。真個はこの作家のものなどは、机に向つて拝見をすべきであろうが、温泉宿の昼間、搔巻を掛けて、じだらくで失礼をしていても、誰も叱言をいわない処がありがたい。

が、この名作家に対しても、田舎まわりの万歳芝居は少々憚る。……で、家内だけ、いくらかお義理を持参で。——ただし煙草をのませない都会の劇の義理見ぶつに切符を押しつけられたような気味の悪いものではない。出来秋の村芝居とおなじ野趣に対して、私も少からず興味を感じる。——家内はいそいそと出て行った。

どれ、寝てばかりもおられまい。もう二十日過だし少し稼ごう。——そのシャルル九世年代記を、わが文化の版、三馬の浮世風呂にかさねて袋棚にさしおいた。——この度胸でないと仕事は出来ない。——さて新しい知己（その人は昨日この宿を立ったが）秋庭俊之君の話を書こう。……

中へ出る人物は、芸妓が二人、それと湘南の盛場を片わきへ離れた、蘆の浦辺の料理茶屋の娘……と云うと、どうも十七八、二十ぐらいまでの若々しいのに聞えるので、一寸工合が悪い。二十四五の中年増で、内証は知らず、表立った男がないのである。京阪地には、こんな婦人を呼ぶのに可いがある。（とうはん）とか言う。……これだと料理屋、待合などの娘で、円鬚に結った三十そこらのでも、差支えぬ。むかしは江戸にも相応しいのがあった、娘分と云うのである。で、また仮に娘分として、名はお由紀と云うのと、秋庭君とである。

それから、——影のような、幻のような、絵にも、彫刻にも似て、神のような、魔のような、幽霊かとも思われる。……歌の、ははき木ぎのような二人ふたりの婦おんながある。

時は今年の真夏だ。——

これから秋庭君の直話じきわを殆どほとんそのままであると云つて可い。

二

「——さあ、あれは明治何年頃でありましようか。……新橋の芸妓げいしやで、人気と言えば、いつもおなじ事のようにございますが、絵端書えはがきや三面記事で評判でありました。一對の名妓なまがが、罪障ざいしょう消滅しょうめつのためだと言います。芸妓の罪障は、女郎の堅気も、女はおなじものと見えますして、一念発起いっぴんぱつしで、廻国かいこくの巡礼じゆんれいに出る。板橋いたはしから中仙道なかせんどう、わざと木曾の山路まじろの寂しい中を辿たどつて伊勢大和めぐり、四国まで遍路へんろをする。……笈おひも笠かさも、用意よういをしたと、毎日のように発心ほつしんから、支度したく、見送人のそれぞれまで、続けて新聞が報道して、えらい騒ぎがありました。笈摺おいずる菅笠すががさと言えば、極きまった巡礼じゆんれいの扮装いでたちで、絵本えほんのも、芝居しばで見えるのも、実際と同じ姿でございませう。……もしこれが間違つて、たとい不図ふとした記

事、また風説のあやまりにもせよ、高尚なり、意気なり、婀娜なり、帯、小袖をそのまま
で、東京をふツと木曾へ行く。……と言う事であつたとしますと、私の身体はその時、ど
うなつていたか分りません。

尚おその上、四国遍路に出る、その一人が円鬻で、一人が銀杏返だつたのであり
ますと、私は立処に杓を振つて飛出したかも知れません。ただし途中で、棧道を踏
むるやら、御嶽おろしに吹飛されるやら、それは分らなかつたのです。

御存じとは思いますが、川越喜多院には、播粉木を立掛けて置かないと云う仕来りが
あります。縦にして置くと変事がある。むかし、あの寺の大僧正が、信州の戸隠まで空
中を飛んだ時に、屋の棟を、宙へ離れて行く。その師の坊の姿を見ると、ちようど台所で
味噌を摺つていた小坊主が、播粉木を縦に持ったまま、破風から飛出して雲に続いた。こ
れは行力が足りないで、二荒山へ落ちたと言うのです。

私にしても、おなじ運命かも知れません。別嬪が二人、木曾街道を、ふだらくや岸打
つ浪と、流れて行く。岨道の森の上から、杓を持った金釦が団栗ころげに落ちて
のめつたら、余程……妙なものが出来たろうと思ひます。

些と荒唐無稽に過ぎるようですが、真実で、母可懐く、妹恋しく、唯心も空に憧憬

れて、ゆかりある女と言えば、日とも月とも思う年頃では、全く遣りかねなかつたのでございます。——幼いうちから、みなしご孤だつた私は、その頃は、本郷の叔父のうちに世話になつて、——大学へ通つていました。……文科です。

幸ですか、いかか如何だか、単に巡礼とばかりで、その芸妓たちの風俗から、円鬚と銀杏返と云う事を見出さなかつたばかりに、胸を削るような思ばかりで済みました。

もとより、円鬚と銀杏返と、一人ずつ、別々に離れた場合は、私に取つて何事もありません。——申すまでもない事で、円鬚と銀杏返を見るたびに、杓を持つて追掛けるのでは、いろきちがい色情狂を通り越して、人間離れがします、だいどうなか大道中で尻尾を振る犬と隔りはありません。

それに、私が言う不思議な婦は、いつも、円鬚に結つた方は、品がよく、高尚で、おもな面長で、そして背がすらりと高い。色は澄んで、滑らかに白いのです。銀杏返の方は、そんなでもなく、少し桃色がさして、顔もふつくりと、こぶと中肉……が小肥りして、些と肩幅もあり、較べて背が低い。この方が、三つ四つ、さよう、……どうかすると五つぐらい年とし紀下で。しま縞のきものを着ている。円鬚のは、小紋か、無地かと思う薄うすいろ色の小袖です。

思いもかけない時、——何処と言つて、場所、時を定めず、私の身に取つて、ほうきぼし彗星のように、スツとこの二人の並んだ姿の、あらわ顕れるのを見ます時の、その心持と云つてはあ

りません。凄いとも、美しいとも、床しいとも、寂しいとも、心細いとも、可恐いとも、また貴いとも、何とも形容が出来ないのです。

唯今も申した通り、一人ずつ別に——二人を離して見れば何でもありません。並んで、すつと来るのを、ふと居る処を、或は送るのを見ます時にばかり、その心持がしますのです。—

著者はこれを聞きながら、思わず相対つていて、杯を控えた。

——こう聞くと、唯その二人立並んだ折のみでない。二人を別々に離しても、円鬚の女には円鬚の女、銀杏返の女には銀杏返の女が、他に一体ずつ影のように——色あり縞ある——影のように、一人ずつ附いて並んで、……いや、二人、三人、五人、七人、おなじようなのが、ふらふらと並んで見えるように聞き取られて、何となく悚然した。

三

「はじめで、その二人の婦を見ましたのは、私が八つ九つぐらいの時、故郷の生家で。…母親の若くてなくなりました一周忌の頃、山からも、川からも、空からも、町に霽の降

りくれる、暗い、寂しい、寒い真夜中、小学校の友だちと二人で見ました。——なまけもの節季せつきばたらきとか言つて、試験の支度したくに、徹夜で勉強をして、ある地誌ちしりやく略りやくを読んできました。——白山はくさんは北陸道第一の高山にして、郡の東南隅とうなんぐうに秀ひいで、越前えちぜん、美濃みの、飛騨ひだに跨またがる。三峰さんぼうあり、南を別山べつざんとし、北を大汝嶽おおなんじだけとし、中央を御前峰ごぜんがみねとす。……後に劍峰けんがみねあり、その状さま、五剣ごけんを植うるが如し、皆四時雪しじを戴いたく。山中に千仞瀑せんじんだきあり。御前峰の絶壁かくに懸かる。美女坂びじよがより遙はるかに看みるべし。しかれども唯飛流ひりゆうの白雲うちの中より落おつるを見るのみ、真に奇観きかんなり。この他美登利池たみどりがいけ、千歳谷せんざいだに——と、びしよびしよと冷く読よんでいると、しばらく降止ふりやんで、ひっそりしていたのが急にばらばらと霰あられになった。霰……横の古襖やぶれめの破目やぶれめで真暗な天井から、ぽつと燈明あかりが映ります。寒さにすくんで鼠も鳴かない、人ツ子の居ゐない二階にがいの、階子段はしごだんの上へ、すつとその二人の婦おんなが立ちました。縞がらの銀杏返ぎんぎょうがえの方が硝子台がらすだいの煤すすけた洋燈ランブを持っていきます。ここで、聊いささでも作意さくごがあれば、青い蠟燭ろうそくと言いたいのですが、洋燈ランブです。洋燈ランブのその燈ひです、その燈ひで、円鬚おんなの婦おんなの薄色うすいろの衣紋えもんも帯おびも判然はつきりと見みえました。あつと思おもうと、トントン、トントンと静しずかな燈音あしおととともに階子段はしごだんを下くだりて来る。キャツと云いつて飛上とびあった友だちと一いっ所に、すぐ納戸なごもの、父の寝ねている所へ二人で転ころがり込みました。これが第一時の出現こぞもで、小児こどもで邪氣じまのない時の事

ですから、これは時々、人に話した事がありますが。

翌年でしたか、また秋のくれ方に、母のない子は、蛙かえるがなくなから帰ろ、で、一度別れた友だちを、尚なおさみしさに誘いたくつて、町を左隣家の格子戸の前まで行くと、このしもた屋は、前町まえまちの大商人おおあきんどの控屋ひかえやで、凡およそ十人ぐらいは一側ひとかわに並んで通ることの出来る、広い土間が、おも屋まで突抜つきぬけていると言うのですが、その土間と、いま申した我家の階子段とは、暗い壁一重ひとえになつていました。

稚おさない時は、だから、よく階子の中段に腰を掛けて、壁越に、その土間を歩あ行く登音や、ものいう人声を聞いて、それをあの何年何月の間あいだか、何処までも何処までもほり抜くと、つちひとかわした土一皮下に人声がして、遠くで鶏にわとりの鳴くのが聞えたと言う、別の世界の話声が髻ほうふつ髻ふつとして土間から漏れる。……小児こどもごころに、内うちの階子段は、お伽話あやしの怪い山の、そのまま薄暗い坂でした。——そこが、いまの隣家となりの格子戸から、間まを一つかまち櫃かまちに置いて、大おおな穴あなのよううに偶ふと見えしました。——その口へ、円鬚まるまげの婦おんながふつと立つ。同時に並んでいた銀杏いちょう返がえしのが、腰を消して、一寸足もとの土間へ俯うつむ向きました。これは、畳を通るのに、駒こ下駄まげたを脱いで、手に持つのだ、と見る、と……そのしもた家へ、入るのではなくて、人の居まない間まを通とおりぬぬけに、この格子戸へ出ようとするので、何故か、そう思うと、急おそに可ろ

恐くなつて、一度、むこうへ駈出して、また夢中で、我家へ遁込んでしまいました。

二年ばかり経つてからです。父のために、頻に後妻を勧めるものがあつて、城下から六七里離れた、合歡の浜——と言う、……いい名ですが、土地では、眠そうな目をしたり、坐睡をひやかす時に（それ、ねむの浜からお迎が。）と言います。ために夢見る里のよくな気がします。が、村に桃の林があつて、浜の白砂へ影がさす、いつも合歡の花が咲いたようだと言うのだそうです。その浜の、一向寺の坊さんの姪が相談の後妻になるので、父に連れられて行きました。生れてから三里以上歩行いたのは、またその時がはじめです。母さんが出来ると云うので、いくら留められても、大きな草鞋で、松並木を駈けました。庵のような小寺で、方丈の濡縁の下へ、すぐに静な浪が来しました。尤もその間に拾うほどの浜はありません。——途中建場茶屋で夕飯は済みました——寺へ着いたのは、もう夜分、初夏の宵なのです。行燈を中にして、父と坊さんと何か話している。とんびずわりの足を、チクチク蚊がくいます、行儀よくじつとしてはいられないから、そこは小児で、はきものとも言わないで縁からすぐに浜へ出ました。……雪国の癖に、もう暑い。まるツ切風がありません。池か、湖かと思う渚を、小児ばかり歩行いていました。が、月は裏山に照りながら海には一面に茫と靄が掛つて、粗い貝も見つかからないので、所在なく

て、背丈に倍ぐらいな磯馴松に凭懸つて、入海の空、遠く遙々と果しも知れない浪を見て、何だか心細さに涙ぐんだ目に、高く浮いて小船が一艘——渚から、さまで遠くない処に、その靄の中に、影のような婦が二人——船はすらすらと寄りました。

舷に手首を少し片舷をもたせて、じつと私を視たのが円鬚の婦です、横に並んで銀杏返のが、手で浪を搔いていました。その時船は銀の色して、浜は颯と桃色に見えた。合歓の花の月夜です。——（やあ父さん——彼処に母さんと、よその姉さんが。……）——後の々々私は、何故、あの時、その船へ飛込まなかつたらうと思ふ事が度々あります。世を憐む時、病に困んだ時、恋に離れた時です。……無論、船に入らうとすれば、海に溺れたに相違ない。——彼処に母さんと、よその姉さんが、——そう言つて濡縁に飛びついたのは、まだ死なない運命だつたらう、と思ひます。

言うまでもありませんが、後妻のことは、其処でやめになりました。

可厭な、邪慳らしい、小母さんが行燈の影に来て坐っていましたもの。……」
俊之君は、話しかけて、少時思にふけたようであつた。

「……その後、時を定めず、場所を扱はず、ともするとその二人の姿を見た事があるので。何となく、これは前世から、私に附纏つている、女体の星のように思われます。

——いえ、それも、世俗になずみ、所帯に煩わしく、家内もあるようになってからは、ついで、忘れ勝がち……と言うよりも、思おも出いださない事さえ稀で、偶たまに夢に視みて、ああ、また（あの夢か。）と、思うようになりました。

——処ところが、この八月の事です——

寺と海とが離れたように、間まを抜いてお話ししましょう。が、桃のうつる白妙しろたえの合歡の浜のようでなく、途中は渺びようぼう茫ぼうたる沙漠のようで……」

四

「東京駅で、少し早めに待合まちあわして。……つれはまだかと、待合室からプラットホオムを出口の方へ掛かかった処で、私はハツと思ひました。……まだ朝のうちだが、実に暑い。息苦しいほどで、この日中が思おも遣いやられる。——海岸へ行くにしても、途中がどんなだろう。見合せた方がよかつた、と逡巡しりごみをしたくらいですから、頭脳あたまがどうかしてはいはしないかと、危あやぶみました。

あの、いきれを挙げる……むツとした人混雜ひとごみの中へ——円鬻まるまげのと、銀杏返いちようがえしのと、

二人の婦おんなが夢のように、しかも羅うすもので、水際立って、寄って来ました。(あら。)と莞爾にっこりして、(お早う。)と若い方が言うと、年上の上品なのは、一寸俯目ちよつとふしめに頷うなずくようにして、挨拶しました。」

——先刻さつきは、唯、芸妓げいしやが二人、と著者は記しるした。——俊之君は、「年増と若いのに。」と云って話したのである。が、ここに記しつつ思うのに、どうも、どっちも——これから後のちも——それだと、少なくとも、著者がこの話についてうけた印象に相当しない。更あらためて仮に姉と、妹としようと思う。……

「私は目が覚めたように、いや、龍宮から東京駅へ浮いて出た気がしました。同時に、どやどや往來ゆききする人脚ひとあしに乱れて二人は、もう並んではいません。私と軽い巴ともえになって、立たち止ちどまりましたので。……何の秘密も、不思議もない。——これが約束をした当日の同伴つれなので。……実は昨夜、或場所で、余りの暑さだから、何処いかいき抜きに、そんなに遠くない処へ一晩どまりで、と姉の方から話が出たので、可よかろう、翌日あしたにも、と酒の勢いきおいで云つたものの、用もたたまっていきますし、さあ、どうしようか、と受けた杯よどを淀よどまして、——四五日経ってからの方が都合は可いいのだがと、煮切にえきらない。……姉さんは温和おだやかだから、ええええ御都合のいい時で結構。で、杯洗はいせんへ、それなり流れようとした処へ、(何の話

？……）と、おくれて来た妹が、いきなり、（明日が可い、明日になさい、明日になさい、ああこう云つてると、またお流れになる。）そこで約束が極きまつて、出掛ける事になったのです。——昨夜ゆうべの今朝けさですもの、その二人を、不思議に思うのが却かえつて不思議なくらいで、いや自然このみの好このみは妙なものだ、すらりとした姉の方が、細長い信玄袋を提ひげて、肩幅の広い背の低い方が、ポコンと四角張つて、胴の膨れた鞆たもとを持つている、と、ふとおかしく思うほど、幻は現実に、お伽の坊やは、芸妓づれのいやな小父さんになりましたよ。

乗のりこ込んでから、またどうか云う工合で、女たちが二人並ぶか、それを此方こつちから見ると、云つた風ふうになると、髪かみの形ばかりでも、菩提ぼだい樹じゆか、石榴ざくろの花に、女の顔した鳥が、腰掛けた如くに見えて、再び夢心に引ひき入れられもしたのでありましようけれど、なかなか、そんな事を云つていられる混雑こんざつ方かたではなかつたのです。

折からの日曜で、海岸へ一日がえりが、群むらり掛かける勢いきおいだから、汽車の中は、さながら野天のてんの蒸風呂へ、衣服きものを着きて浸つかつたようなありさまで。……それでも、当初はな乗のりこつた時は、一つ二つ、席せきの空いたのがありました。クシヨンは、あの二人ずつ腰こしを掛ける詭あつらえので、私は肥で満みした大柄つぶりの、洋服着た紳士しんしの傍わき、内側へ、どうやら腰が掛けられました。ちようど、椅子を開いて向むか合あに一つ空席あきがありましたので、推されながら、この真中ほどへ来た

女たちが、

(姉さん。)

(まあ、お前さん。)

と讓ゆずりあ合あいながら、その円鬘まるまげの方が、とに角かく、其処へ掛けようとすると、

(一人居るんです。) と言った、一人居た、茶と鼠の合の子の、麻らしい……詰襟つめえりの洋服を着た、痩せたが、骨組のしつかりした、浅黒い男が、席を片腕で叩くのです。叩きながら上着を脱いで、そのあいた処へ芻はねました。——さいわい斜はすかい違ちがいのクシヨンへ、姉は掛ける事が出来ましたし、それと背中合せに、妹も落着いたんです。御存じの通り、よっかかりが高いのですから、その銀杏いちょうがえし返かえしは、髪も低い……一寸ちよつと雛箱ひなばこへ、空色天鵝絨びろうどの蓋をした形に、此方こつちから見えなくなる。姉の円鬘ばかり、端正きんじとして、通とを隔へてて向合むかいあつたので、これは弱よつた——目顔めがおで串じょうだん戯あそも言えない。——たかだか目的とく地ちまで三時間に足りないのだけれど、退屈たいくつだなど思おもいましたが、どうして、退屈などと云う贅沢ぜいさくは言いつていられない、品川しんがわでまた一もみ揉もみこ込んだので、苦しいのが先に立ちます。その時も、手で突張つっぱつたり、指で弾はいたり、拳で席はを払はいたり、(人が居るです、——一人居るですよ。) その、貴下あなた……白襯衣しろしやつ君の努力と云つてはなかつた。誰にも掛けさせまいとする。……

大方その同伴は、列車の何処かに知合とでも話しているか、後架にでも行つてるのであるが、まだ、出て来ません。このこみ合う中で、それとも一人占めにしようとするのか知ら、些と怪しからんと思ううちに、汽車が大森駅へ入った時です。白襯衣君が、肩を聳やかして突立つて、窓から半身を乗出したと思うと、真赤な洋傘が一本、矢のように窓からスポリと飛込んだ。白襯衣君がパツとうけて、血の点滴るばかりに腕へ留めて抱きました。色が、色の道には、あの、スパルタの勇士の趣がありましたよ。汽車がまだ留らない間の早業でしてなあ。」

俊之君は、吻と一息を吐いて言つた。

「敏捷い事……忽ち雪崩れ込む乗客の真前に大手を振つて、ふわふわと入つて来たのは、巾着ひだの青い帽子を仰向けに被つた、膝切の洋服扮装の女で、腕に南京玉のピカピカしたオペラバックと云う奴を釣つて、溢出しそうな乳を圧えて、その片手を——振るのではない、洋傘を投げたはずみがついて、惰力が留まらなかつたものと考えられます。お定りの、もう何うにもならないと云つた大な尻をどしんと置くのだが、扱いつけていると見えて、軽妙に、ポンと、その大な浮袋で、クシヨンへ叩きつけると、赤い洋傘が股へ挟まつたように捌ける、そいつを一蹴けつて黄色な靴足袋を膝でよじつて両脚を

重ねるのをキツカケに、ゴム靴の爪さきと、洋傘こうもりの柄をつつく手がトントンと刻んで動く、と一いつしょ所に、片腕を白襯衣しろしやつの肩へ掛けて、円々まるまるしい頤あごを頬杖もたで凭せかけて、何となく乳首ちちうぶだけ両方へかくれた、一面に寛はだげた胸をずうずうと揺ゆすつて、（おお、辛度しんど。）と故わざとらしい京弁で甘あまつたれて、それから饒舌しやべる。のべつに饒舌しやべる……黄色い歯の上下に動くのと、猪首いくびを巾着帽子ふちつの縁ふちで突つくのと同時なんです。

二の腕から、頸えりは勿論、胸の下までべた塗ぬりの白粉おしろいで、大切な女の膚はだえを、厚化粧で見せてくれる。……それだけでも感謝しなければなりません。剩あまつさえ貴い血まで見せた、その貴あ下な、いきれを吹きそうな鳩尾みすおちのむき出た処ところに、ぽちぽちと蚤のみのくつた痕あとがある。

——川崎を越す時分には、だらりと、むく毛の生えた頸くびを垂たれて、白襯衣君の肩へ眉毛まで押おかけて、坐いねむり睡ねがをはじめたのですが、俯うつむけじやあ寝勝手ねがが悪いと見えて、ぐらぐら首くびを揺ゆするうちに、男の肩へ、斜はすに仰あお向け状さまにくたりとなつた。どうも始末ひつに悪いのは、高く崩れる裾すそですが、よくしたもので、現うつに、その蚤のみの痕あとをござし引搔ひっかく次手ついでに、膝ひざを振ねじ合わせては、ポカリと他人ひとの目の前へ靴の底そこを蹴け上げるのです。

男の方は、その重量おもみで、窓際へ推おし曲ゆがめられて、身体からだを弓形ゆみなりに堪たえて納なまっている。はじめは肩かたを抱だき込んで、手を女の背中へまわしていました。……膚はだいきれと、よっかかり

の天鵝絨で、長くは暑さに堪りますまい。やがて、魚を仰向けにしたような、ぶくりとした下腹の上で涼ませながら、汽車の動揺に調子を取って口笛です。

娑婆はこのくらいにして送りたい、羨しいの何のと申して。

私は目の遣場に困りました。往來の通も、ぎつしり詰って、まるで隙間がないのです。

現に私の頭の上には、緋手絡の大円鬚が押被さつて、この奥さんもそろそろ中腰になつて、坐睡をはじめたのです。こくりこくりと遣るのに耳へも頬へもばらばらとおくれ

毛が掛つて来る。……鬢のおくれ毛が掛るのを、とや角言つては罰の当つた話ですが、どうも小唄や小本にあるように、これがヒヤリと参りません。べとべとと汗ばんで、一条かかると濛とします。ただし、色白で一才、きれいな奥さんでしたが、えらい子持だ。

中を隔てられて、むこうに、海軍帽子の小児を二人抱いて押されている、脊のひよろりとしたのが主人らしい。その旦那の分と、奥さん自身のと、——私は所在なさに、勘定をしましたが、小児の分を合わせて洋傘九本は……どうです。

さあ、事ここに及んで、——現実の密度が濃くなつては、円鬚と銀杏返の夢の姿などは、余りに影が薄すぎる。……消えて幽霊になつて了つたかも知れません。

(清涼薬……)

と、むこうで、一寸ちよつと噪なほいだ、お転婆てんぱらしい、その銀杏返の声があると、ちらりと瞳が動く時、顔が半分無理に覗いて、フンと口許で笑いながら、こう手が、よっかかりを越して、姉の円鬚の横へ伝つたつて、白く下りると、その紙づつみを姉が受けて、子持の奥さんの肩の上から、

(清涼薬きつげですって。……嚙さぞお暑い事ことで。……)

と、腹の上で揺れてる手を流ながしめ、眊めに見て、身を引きました。

私は苦笑をしながら、ついで食べつけない、レモン入りの砂糖を舐なめました。——如何いかにこの動作で、その二人の婦おんながやつと影を躪あわし得た気がなさりはしませんか。

時に、おなじくその赤い蝙蝠こうもり——の比翼の形を目と鼻のさき前にしながら、私と隣合つた年配の紳士は、世に恐らく達人と云つて可い、いや、聖人と言いたいほどで。——何故と云うと、この紳士は大森を出てから、つがいの蝙蝠が鎌倉で、赤い翼を伸のして下りた時まで、眠り続けて睡ねむっていました。……

真個ほんとうに寝ていたのかと思うと、そうではありません。つがいが飛んだのを見ると、明あきらかに眼まなこを活かして、棚のパナマ帽を取つて、フツと埃を窓の外へ弾はじきながら、

(御窮屈ごきうくつでございましたらう……御迷惑ごめいわくで。)

澄まして挨拶をされて、吃驚して、

(いや。どう仕りました。)

と面くらう隙に、杖を脇挟んで悠然と下車しましたから。」

俊之君は、ここで更に居坐を直して続けた。……

五

「お話のいたしように、どうお取りになったか知れないのでありますが、私は紳士に敬意を表するとともに、赤い蝙蝠にも、年児の奥さんにも感謝します。決して敵意は持ちません。そのいずれの感化であったかは自分にも分りません。が、とに角、その晩、二人の婦と、一ツ蚊帳に……成りたけ離れて寝ましたから。

——さあ、何時頃だったでしょう——二度めに、ふと寝苦しい暑さから、汗もねばねばとして目の覚めましたのは。——夜中も、その沈み切った底だったと思います。うつうつしながら糠に咽せるように鬱陶しい、羽虫と蚊の音が陰に籠って、大蚊帳の上から圧附けるように息苦しい。

蚊帳は広い、大いのです。廻縁の角座敷の十五畳一杯に釣って、四五ヶ所釣を取ってまだずるり——と中だるみがして、三つ敷いた床の上へ蔽いかかって、縁へ裾が溢れている。私には珍しいほどの殆ど諸侯道具で。……余り世間では知りませんが、旅宿が江戸時代からの旧家だと聞いて来たし、名所だし、料理旅籠だししますから、いずれ由緒あるものと思われる、従って古いのです。その上、一面に嬰兒の掌ほどの穴だらけで、干潟の蟹の巢のように、ただ一側だけでも五十破れがあります。勿論一々継を当てた。……古麻に濃淡が出来て、こう瞬をするばかり無数に取巻く。……この大痘痕の化ものの顔が一つ天井から拔出したとなると、可恐さのために一里滅びようと言った。……ありさまなんです。——ここで一寸念のために申しますが、この旅籠屋も、昨年の震災を免れなかつたのに、しかも一棟焚けて、人死さえ二三人あつたのです——蚊帳は火の粉を被つたか、また、山を荒して、畑に及ぶと云う野鼠が群り襲い、当時、壁も襖も防ぎようのなかつた屋のうちへ押入つて、散々に喰散らしたのかとも思われる。

女中が二人で、宵にこの蚊帳を釣った時、

(まあ。)

と浮りしたように姉が云うと、

(お気の毒だわね。)

と思わず妹も。……この両方ふたかただつて、おなじく手拭浴衣一枚で、生命を助たすつて、この蚊帳を板にした同然な、節穴と隙間だらけのバラックに住んでいるのに、それでさえそう言つた。

——実は、海岸も大分片よつた処ですから、唯聞いたばかり、絵で見たばかりで様子を知らない。——宿が潰れた上、焚けて人死があつた事は、途中自動車の運転手に聞いて、はじめて知つたのです。

(——それは少し心配だな。)

二人の婦おんなも、黙つて顔を見合せました。

おそろしい崖崩れがそのままになつていて、自動車が大揺れに煽あおつた処で。……またそれがために様子を聞きたくもなつたのでした。

運転手は悍馬かんばを乗のり鎮しずめるが如くに腰を切つて、昂然こうぜんとして、
(来きたる……九月一日、十一時五十八分までは大丈夫請合います。)

と笑つて言つた。——(八月十日頃の事です)——

畜生、巫山戯ふざけている。私は……一昨々年——家内をなくしたのでございませうが、連つれがそれだつたらこういう蔑なめた口は利きますまい。いや、これに対しても、いまさら他よその家へとも言いたくなし、尤もつとも其家そこをよしては、今頃間貸まがしをする農家ぐらいなものでしょうから。（構かまわない、九月一日まで逗留どだ。）

と擬勢ぎせいを示した。自動車は次第に動揺が烈れいしくなつて乗込のりこみました。入江に渡した村はずれの土橋などは危あやなかしものでした。

場所は逗子から葉山を通つて秋谷あきや、立石たていしへ行く間あいだの浦うらなんです。が、思つたとは大變な相違さむで、第一土橋と云う、その土橋の下にまるで水がありません、……約束では、海の波なみが静しずかにこの下を通つて、志した水戸屋みなどやと云うの庭へ、大おおな池に流れて、縁えん前さきをすぐすぐに漁船が漕こぐ。蘆あしが青簾あおすの筈はずなんです。処ところが、孰方どつちを向いても一面の泥田、沼ともいわず底ぞこが浅あい。溝どろをたたきつけた同然どうぜんに炎天えんてんに湧いたのが汐しほで焼けて、がさがさして、焦こげています。……あの遠くとほくの雲が海うみか知らんと思おもうばかりです。干瀉かんさと云うより亡ほろびた沼しほです。氣きの利いた蛙かなんか疾はやくに引越ひきこして、のたり、のたりと蚯蚓みみずが雨乞あまごいに出いそうな汐筋しほすじの窪地くぼちを、列りを造つくつて船虫はねむしが這はまわる……その上うへを、羽虫はねむしの大群おほむれが、随所もろもろに固こつて濛も々もと、舞まつているのが炎天えんてんに火薬かやくの煙けむりのようように見みえました。

半ばひしやげたままの藤棚の方から、すくすくとこの屋台を起して支えた、突支棒の丸太越に、三人広縁に立つて三方に、この干からびた大沼を見た時は、何だか焼原の東京が恋しくなつた。

贅沢だとお叱んなさい。私たちは海へ涼みに出掛けたのです。

(海には汐の満干があるよ、いまに汐がさすと一面の水になる。)

折角、楽みにして、嬉しがって来た女連に、氣の毒らしくって、私が言訳らし

くそう言いますと、

(嚙ぞようござんしようねお月夜だったら。)

姉の言つた事は穩です。

些と跳ねものの妹のをお聞きなさい。

(雪が降るといい景色だわね。)

真実の事で。……これは決して皮肉でも何でもありません。成程ここへ雪が降れば、雪

舟が炭団を描いたようになりましょう。

それも、まだ座敷が極つたと言うのではなかつたので。……ここの座敷には、蜜柑の皮

だの、キャラメルの箱だのが散ばつて、小児つれの客が、三崎へ行く途中、昼食でも

して行つた跡をそのままらしい。障子はもとより開放してありました。古襖がたてつけの悪いままで、その絵の寒山拾得が、私たちを指して囁き合っている体で、おまけに、手から拔出した同然に箒が一本立掛けてあります。

串戯にも、これじや居たたまらないわけなんです、些とも気にならなかつたのは、

——先刻広い、冠木門を入つた時——前庭を見越したむこうの縁で、手をついた優しいおんな婦を見たためです。……すぐその縁には、山林局の見廻りでもあろうかと思う官吏風の洋装したのが、高い沓脱石を踏んで腰を掛けて、盆にビール罎を乗せていました。またこの形は、水戸屋がむかしの茶屋旅籠のままらしくて面白し……で、玄関とも言わず、迎えられたまま、その傍から、すぐ縁側へ通つたのですが、優しい婦が、客を嬉しそうに見て、（お暑うございましたでしょう、まあ、ようこそ、——一寸お休み遊ばして。）

と、すぐその障子の影へ入れる、とすぐ靴の紐を纏つていた洋装のが、ガチリと釣銭を衣兜へ挿込んで、がっしりした洋傘を支いて出て行く。……いまの婦は門外まで、それを送ると、入違いに女中が、端近へ茶盆を持って出て、座蒲団をと云つた工合で？……うしろに古物の衝立が立つて、山鳥の剥製が覗いている。——処へ、三人茶盆を中にして坐つた様子は、いまに本堂で、志す精霊の読経が始りそうで何とも以て陰気

な処へ、じとじと汗になるから堪りません……そこで、掃除の済まない座敷を、のそのそして、——右の廻縁へ立った始末で。……こう塩辛い、大沼を視めるうちに、山下の向う岸に、泥を食つて沈んだ小船の、舷がささらになつて、鯉ならまだしも、朝日奈が取組合つた鰐の顔かと思うのを見つけたのも悲惨です。

山出しの女中が来て、どうぞお二階へ、——助かった、ここで翌朝まで辛抱するのかと断念めていたのに。——いや、階子段は、いま来た三崎街道よりずつと広い、見事なものです。三人撒いたように、ふらふらと上ると、上り口のまた広々とした板敷を、縁側へ廻る処で、白地の手拭の姉さんかぶりで、高箒を片手に襷がけで、刻足に出て行逢つたのがその優しい婦で、一寸手拭を取つて会釈しながら、軽くすり抜けてトントンと、堅い段を下りて行くのが、あわただしい中にも、如何にも淑かで蹺音が柔うございしました。

何とも容子のいい、何処かさみしいが、目鼻立のきりりとした、帯腰がしまつていて、そして媚かしい、なり恰好は女中らしいが、すてきな年増だ。二十六七か、と思つたのが——この水戸屋の娘分——お由紀さんと言うのだとあとで分りました。

——また、奇異なものを見ました——

貴下には、矢張り唐突に聞えましようが、私には度々の事で。……何かと申すと——例の怪しい二人の婦の姿です。——私が湯から上りますと、二人はもう持参の浴衣に着換えていて、お定りの伊達巻で、湯殿へ下ります、一人が市松で一人が独鈷……それも可い……姉の方の脱いだ明石が、沖合の白波に向いた欄干に、梁から衣紋竹で釣って掛けてさぼしてある。裾にかくして、薄い紫のぼかしになった蹴出しのあるのが、すらすら捌くように、海から吹く風にそよいでいました。——午後二時さがりだったと思います。真日中で、土橋にも浜道にも、人一人通りません。が、さすがに少し風が出ました。汗が引いてスツと涼しい。——とその蹴出しの下に脱いで揃えた白足袋が、蓮……蓮には済まないが、思うまま言わして下さい。……白蓮華の荅のように見えました。同時に、横の襖に、それは欄間に釣って掛けた、妹の方の明石の下に、また一絞りにして朱鷺色の錦紗のあるのが一輪の薄紅い蓮華に見えます。——東京駅を出て、汽車で赤蝙蝠に襲われた、のちこの時まで、（ああ、涼しい。）と思えたのは、自動車で来る途中、山谷戸の、路傍に蓮田があつて、白いのが二三輪、早にも露を含んで、紅蓮が一輪、むこうに交つて咲いたのを見た時ばかりであつたからです。

また涼しい風が颯と来しました。羅は風よりも軽い……姉の明石が、竹を迂ると、さらりと落ちたが、畳まれもしないで、煽った襟をしめ加減に、細りとなって、脇あけも採れながら、フツと宙を浮いて行く。……あ、あ、と思ううちに、妹のが誘われて、こう並んでひらひらと行く。後のの裾が翻つたと見る時、ガタリと云って羅の抜けたあとへ衣紋竹が落ちました。一つは撥られるように、一つは抱くようにと、見るうちに、床わきへ横に靡いて両方裾を流したのです。

私は悚然とした。

ばかりではありません。ここで覚めるのかと思う夢でない所を見ると、これが空蟬になつて、二人は、裏の松山へ、湯どのから消失させたのではなからうか——些と仰山なようであるが真個……勝手を知った湯殿の外まで密と様子を見に行つたくらいです。婦の事で、勿論戸は閉めてある。妹の方の笑声が湯気に籠つて、姉が静に小桶を使う。その白い、かがめた背筋と、桃色になつた湯の中の乳のあたりが、卑い事だが、想像されて。……ただし、紅白の蓮華が浴する、と自讃して後架の前から急に蹻音を立てて、二階の見霽へ帰りました。

や、二人の羅が、もとの通り、もとの処に掛っている、尤も女中が来て、掛け直したと

思えば、それまでなんです、まだ希有な気がしたのです。

けれども、午飯のお詠が持出されて、湯上りの二人と向合う、鯛のあらいが氷に乗って、小蝦と胡瓜が揉合つた処を見れば無事なものです。しかも女連はビールを飲む。ビールを飲む仏もなし、鬼もない。おまけに、（冷蔵庫じゃないわね。）そ、そんな幽霊があるもんじゃありません。

況や、三人、そこへ、ころころと昼寝なんぞは、その上、客も、芸妓もない、姉も妹も、叔母さんも、更に人間も、何にもない。

暮方、またひつたりと蒸伏せる夕風になりました。が、折から淡りと、入江の出岬から覗いて来る上汐に勇氣づいて、土地で一番景色のいい、名所の丘だと云うのを、女中に教わつて、三人で出掛けました。もう土橋の下まで汐が来ました。路々、唐黍畑も、おいらん草も、そよりともしないで、ただねばりつくほどの暑さではありましたが、煙草を買えば（私が。）（あれさ、細いのが私の方に。）と女同士……東京子とうきょうこは小遣あぶなを使います。野掛け気分で、ぶらぶら七八町出掛けまして、地震で崩れたままの危かしい石段を、藪だの墓だのの間を抜けて、幾いくうね蜿蜒りかして、頂上へ——誰も居ません。葭簀よしずば張の茶店が一軒、色の黒い皺しなびた婆さんが一人、真黒な犬を一匹、膝ひざに引つけていて、

じろりと、犬と一所いっしょに私たちを睨ながめましたつけ。……

この婆さんに、可厭いやな事を聞きました。——

……此処で、姉の方が、隻手かたてを床几しょうぎについて、少し反身そりみに、浴衣腰を長くのんびりと掛けて、ほんのり夕靄ゆうもやを睨ながめている。崖縁がけぶちの台つきの遠目金とのおめがねの六尺ばかりなのに妹が立掛たちかかった処は、誰も言うた事ですが、広重ひろしげの絵をそのままの風情でしたが——婆の言う事で、変な気になりました。

目の下の水田みずたへは雁かりが降りるのだそうです。向うの森の山寺には、暮六くれむつの鐘が鳴ると言う。その釣鐘堂も崩れました。右の空には富士が見える。それは唯深い息づきもしない靄霧です。沖も赤く焼けていて、白帆の影もなし、折から星一つ見えません。

(御覧じやい、あないにの、どす黒くへりを取った水際から、三反たんも五反たんと、沖の方へさ汐ひの干た処とこへ、貝、蟹の穴からや、によきによきと蘆あしが生えましたぞい。あの……蘆あしがつくようでは、この浦は、はや近うちに、干上わかつて陸おかになるぞいの。そうもござりましょ。

……去年の大地震で、海の底が一体いったいに三尺がとこ上りましての、家々の土地面つちじめんが三尺たたら踏おちこんで落おちこ込みましたもの。の。いま、さいて来た汐も、あれ、御覧じやい。……海鼠なまこが這うようにちよろちよろと、蘆間あしまをあとへ引きますぞいの。村中が心を合せて、泥どろやち

浚いをせぬ事には、この浦は、いまの間に干潟まになつて、やがて、ただ茫々ぼうぼうと蘆あしばかりになるぞいの。……)

何なにだか独ひとりごと言ことのように言つて聞かせて、鑄茶釜さびちやがまに踞しゃがんで、ぶつぶつ遣やるたびに、黒犬の背中を擦さすると、犬が、うううう、ぐうぐうと遣る。変に、犬の腹から声を揉もみだ出すよう
で、あ、あの婆おばさんの、時々ニヤリとする齒はが犬に似ている。薄暮うすくれあひ合あひに、熟じつとしている
犬の不気味ふきみさを、私は始めて知りました。……

(——旦那様方が泊とまりらつしやつた、水戸屋みづとがの、一番に海へ沈しずんだぞいの。)

靄もの下したに、また電燈でんとうの光を漏はらさない、料理旅籠はたごは、古家ふるいえの藁いらかを黒く、亜鉛屋根トタンが三
面に薄うつつりと光つて、あらぬ月の影を宿やどしたように見えながら、縁えんも庇ひさしも、すぐあの蛇へびのよ
うな土橋つちばしに、庭に吸くわれて、小さな藤棚ふじだまの遁にげようとする方かたへ、大おほく傾かたいているのでした。
(……その時は、この山の下からの、土橋つちばしの、あの入江いりえがや、もし……一面の海でござつ
たがの、轟ごうと沖おきも空も鳴なつて来ると、大地も波なみも、一いち齊ときに箕みで煽あおるように揺れたと思わ
つしやりますし。……あの水戸屋みづとの屋根やねがの、ぐしやぐしやと、骨離ほなれの、柱はしら離りれで挫ひしやけて
の——私わたしらは、この時雨しぐれの松まつの……)

と言いいました。字の傘かさのように高く立つて、枝が一本折れて、崖たけへ傾かたいているを指ゆびさして、

（松の根に這い縋^{すが}つて見ましたがの、潰れた屋の棟の瓦の上へ、一ちさきに、何処の犬やら、白い犬が乗りましたぞい。乾してあつた浴衣が、人間のるように、ぱッぱッと欄干^{てすり}から飛出して、湯の中へへぱりつく。もうその時は、沖まで汐が干たぞいの。ありや海が倒^{さかさま}になつて裏返つたと思ひましたよ。その白犬がの、狂^{きちがい}気になつたかの、沖の方へ、世界の涯^{はて}までと駈出^{かけだ}すと思う時、水戸屋の乾の隅へ、屋根へ抜けて黄色な雲が立ちますとの、赤旗がめらめらと搦^{から}んで、真黒な煙がもんもんと天井まで上りました。男衆も女衆も、その火を消す間に、帳場^まから、何から、家^{うちじゆうきり}中切もりをしてござつた彼家^{あのいえ}のお祖母^{ばばさま}様が死なしやつた。人の生命^{いのち}を、火よりさきへ助ければ可^よいものと、村^{むらかた}方では言うぞいの。お祖母^{ひよこ}様が雛児^{ひよこ}のように抱いてござつた小兒^{こども}衆も二人、一所^{いっしょ}に死んだぞの。婿^{やめめ}つづきの家で、後家^{ごけご}御^{おととし}は一昨年^{おととし}なくなりました……娘^{むすめ}さんが一人で、や、一気に家を装立^{もりた}てていさつしやりますよ。姉^{あね}さんじゃ。弟^{あに}どののは、東京の学校さ入つていさつしやるで。……地震の時
は留守^{としより}じやつたで、評判^{へいばん}のようないは姉娘^{あねむすめ}でござりますよ。——家^{うち}とおのれは助かつても、
老人^{としより}小兒^{こども}を殺^{ころ}いてはのうのう黒犬^{くろいぬ}を、のう、黒犬^{くろいぬ}や——)……

勝手にしろ。殺したのではない、死んだのである。その場合に、圧^{おし}に打たれ、火に包まれたものと進退をともしするのは、助けるのではない、自殺をするのだ、と思ひました。

……私は可厭な事を聞いた、しかし、祖母と小さい弟妹を死なせて水戸屋を背負つて生残つたと言う娘分、——あの優しい婦が確にと、この時直覺的に知りましたが——どんなに心苦しいか……この狭い土地で、嚙ぞ肩身が狭かろう。——胸のせまるまで、いとしく、可憐になつたのです。

(可厭な婆さん……)

(黒犬が憑いてるようね。犬も婆のようだったよ。)

石段を下りかかつて、二人がそう云つた時、ふと見返ると、坂の下口に伸掛つて覗いていました。こんな時は、——鹿は贅沢だ。寧ろ虎の方が可い。礫を取つて投げようとするのを二人に留められて……幾つも新しい墓がある——墓を見ながら下りたんです。

時に——(見たいわね。) 妹なぞもそう言つたのですが、お由紀さんは、それ切姿を見せなかつたのです。

大分話が前後になりました。

処で、真夜中に寝苦しい目の覺めた時です。が、娘分に対しても決して不足を言うんじやあない。……蚊帳のこの古いのも、穴だらけなのも、一層お由紀さんの万事最惜さを

思わせるのですけれども、それにしても凄まじい、——先刻も申した酷い継です。隣室には八畳間が二つ並んで、上下ただだ広い家に、その晩はまた一組も客がないのです。この辺に限らず、何処でも地方は電燈が暗うございますから、顔の前に点いていても、畳の目やつと見える、それも蚊帳の天井に光つておればまだしも、この燈に羽虫の集る事夥多しい。何しろ、三方取巻いた泥沼に群れたのが蒸込むのだから堪りません。微細い奴は蚊帳の目をこぼれて、むらむら降懸るものですから、当初一旦寝たのが、起上つて、妹が働いて、線を手繰つて、次の室へ電燈を持って行ったので、それなり一枚開けてあります。その襖越しにぼんやりと明が届く、蚊帳の裡の薄暗さをお察し下さい。——鹿を連れ た仙人の襖の南面も、婆と黒犬の形に見える。……ああ、この家がぐわしやぐわしやと潰れて乾の隅から火が出た、三人の生命が梁の下で焼けたのだと思うと、色合と言ひ、皺と いい、一面の穴と言ひ、何だか、ドス黒い沼の底に、私たち倒れているような気がしてなりません。

(ああ、これは尋常事でない。)

一体小児の時から、三十年近くの間——ふと思ひ寄らず、二人の婦の姿が、私の身の周囲へ頭わられて、目に遮る時と云うと、善にしろ、悪いにしろ、それが境遇なり、生活なり

の一転機となるのが、これまでに例を違えず、約束なのです。とに角、私の小さい身体一つに取って、一時期を劃する、大切な場合なのです。

(これは、尋常事でない。……)

私は形に出る……この運命の映絵に誘われていま不思議な処へ来た——ここで一生を終るのではないか、死ぬのかも知れない。

枕も髪も影になつて、蒸暑さに沓脱ぎながら、行儀よく組違えた、すんなりと伸びた浴衣の裾を洩れて、しつとりと置いた姉の白々とした足ばかりが燈の加減に浮いて見える。白い指をすツすツと刻んで、瞳をふうわりと浮いて軽い。あの白蓮華をまた思いました。

取継とりすがつて未来を尋ねようか、前世の事を聞こうか。——

と、この方は、私の隣に寝ている。むこうへ、一ひと嵩一かさ寸ちよつと低く妹が寝ていました。

……三分……五分……

紅い蓮華がちらちらと咲いた。幽かすかに見えて、手首ばかり、夢で蝶を追うようなのが、どうやら此方を招くらしい。……

——抱きしめて、未来を尋ねようか。前世の事を聞こうか。——

招く方へは寄易い。

私は、貴方、まきたばこ 巻 葎のの火を消しました。

その時です。ぱちぱちと音のするばかり、大蚊帳の継つぎあな穴が、何百か、ありつたけの目になりました。——蚊帳の目が目になった、——否いえ、それが一つ一つ人間の目なんです。

——お分りになり憎にくうございませうか知ら。……一いちどき齊に、その何十人かの目が目ばかり出して熟じつと覗いたのです。睜みは、瞬またたく、瞳ひとみが動く。……馬鹿々々しいが真個まったくです。睜る、瞬く、瞳が動く。……生なまなま々として覗いています。暗い、低い、大天井ばかりを余して、蚊帳の四方は残らず目です。

私はすくんで了しまいました。

いや、すくんでばかりはおられません。仰向けに胸しつかへ緊乎と手を組んで、両りよう眼がんを押お睡しつむつて、気を鎮めようとしたのです。

三分……五分——十分——

魔は通つて過ぎたろうと、堅く目を開きますと、——鹿と仙人が、婆ばばと黒犬に見える、

——その隣室となりの襖際と寢床の裾——皆が沖の方を枕にしました——裾の、袋戸棚との間が、もう一ヶ所通かよで、裏階うらぼしご子へ出る、一人立ひとりだちの口で。表二階の縁と、広く続いて、両方かよいぐちに通かよ口のあるのが、何だか宵から、暗くて寂さびしゅうございました。——いま、その裏階

子の口の狭い処にぼつと人影が映して色の白い婦が立ちました。私は驚きません。それはまるまげ円鬚の方で……すぐ銀杏返のが出る、出て二人並ぶと同時に膝をついて、駒下駄を持つだろう。小児の時見たのと同じようだ。で、蚊帳から雨戸を宙に抜けて、海の空へ通るのだろうと思いました。私の身に、二人の婦の必要な時は、床柱の中から洋燈を持つて出て来た事さえありますから。」……

「ははあ。」
 著者は思わず肱を堅くして聞いたのであった。

六

「——処がその婦は一人きりで、薄いお納戸色の帯に、幽な裾模様が、すつと蘆の葉のように映りました。すぐ背を伸ばせば届きます。立つて、ふわふわと、凭りかかるようにして、ひつたりと蚊帳に顔をつけた。ああ、覗く。……ありたけの目が、その一ところへ寄つて、爛々として燃えて大蛇の如し……とハツとするまに、目がない、鼻もない、何にもない、艶々として乱れたままの黒髪つやつやの黒い中に、ペろりと白いのつぺらぼう。——」

「……………」

著者は黙つて息を呑んで聞いた。

「うう、と殺されそうな声を呑むと、私は、この場合、婦二人、生命を預る……私は、むくと起きて、しにみに覚悟して、蚊帳を匆ねた、その時、横ゆれに靡いて、あとへ下つたその婦が、気に圧されて遁げ状に板敷を、ふらふらとあと退りに退るのを夢中で引捉えようとなりました。胸へ届きそうな私の手が、迂るが早い、何とも申しようのない事は、その婦は三四尺ひらりと空へ飛んで、宙へ上つた。百合が裂けたように釣られた両足の指が反つて震えて、素足です。藍、浅葱、朱鷺色と、鹿子と、絞と、紫の匹田と、ありたけの扱帯、腰紐を一つなぎに、夜の虹が化けたように、婦の乳の下から腰に絡わり、裾に搦んで。……下に膝をついた私の肩に流れました。雪なす両の腕は、よれて一条になつて、裏欄干の梁に釣した扱帯の結目、ちようど緋鹿子の端を血に巻いて縋っている。顔を背けよう背けようと横仰向けに振つて、よじつて伸ばす白い咽喉が、傷々しく伸びて、蒼褪める頬の色が見る見るうちに、その咽喉へ隈を薄く浸ませて、身悶をするたびに、踏処のない、つぼまった蹴出が乱れました。凄いとも、美しいとも、あわれとも、……踏台が置いてある。目鼻のない、のつぺらぼうと見えたのは、白地の手拭で、顔の

半ば目かくしをしていたのです。」

俊之君は、やや、声忙しく語った。此処で吻と一息した。

「いま、これを処置するのに、人の妻であろうと、妾であろうと、娘であろうと、私は抱取らなければなりません。」

私は綺麗なばけものを、横抱きに膝に抱いて助けました。声を殺して、

(何をなさる。)

扱帯で両膝は結えていました。けれども、首をくくるのに、目隠をするのは可訝しい。

気だけでも顔を隠そうとしたのかと思う。いや、そうでないのです。それに、実は死のうとしたのではない。私から遁げようとしたので、目を隠したのは、見まい見せまいじゃあない。蚊帳を覗くためだったのだから余程変です。」

七

「前後のいきさつで、大抵お察しでありましょう。それはお由紀さんでございました。」

申もうし憎にくうございますけれども、——今しがた、貴方ごれいけいの御令閨かいぞえのお介添かいぞえで——湯殿へ参まゐつております、あの女なのです。

これでは……その時の私と、由紀とのうけこたえに、女のものいいが交まじりましては、尚なお申憎もうしにくうございますから、わけだけを、手取てとり早く……

由紀は、人の身の血も汐も引くかと思う、干瀉くずれやに崩家くずれやを守りつつ、日も月も暗くなり
ました。……村の口の端は、里の蔭かげ言こと、目も心も真暗まになりますと、先せん達だつて頃から、神
棚、仏壇の前に坐まつて、目を閉じて拝かむ時、そのたびに、こう俯うつむ向むく……と、衣きものの縞しま
が、我が膝ひざが、影かげのように薄うつつりと浮ういて見みえます。それが毎日のように度たび重かさなると段だんだ
々んに判はつきり然しか見える。姿見すがたのない処ところに、自分の顔が映うつるようで、向むかうが影かげか、自分おれが影かげか、
何なにとも言いえない心細こころい、寂さびしい気がしたのだそうです。緋かすりは那そんな様なでない、縞しまの方が、余計あま
にきつぱりとしたのが、次第しだいに、おなじまで、映うつる事ことになつたと言いいます。ただ、神仏かみぶつの
前まへにぬかずく時、——ほかには何なにの仔細しじろもなかつた。

処ところが当日あつじ、私わたしたちの着ききますのが、もう土橋つちはしのさきから分わつたと言いうのです。それは別
に気きにも留とめなかつた。黄たそがれ昏れに三人さんにんで、時雨しぐれの松まつの見み霽はらしへ出掛でけるのを、縁えんの柱はしらで、

悄乎しよんぼりと、藤棚越のびあがに伸上のびあがつて見ていると、二人に連れられて、私の行くのが、山ではなしに、干潟を沖へ出て、それ切きり帰らない心持がしてならなかった。無事に山へ行きまして。——が、遠目金とおめがねを覗くのも、一人が腰を掛けたのも、——台所へ引ひっこ込んでまでもよく分る。それとともに、犬婆さんが、由紀の身について饒舌しやべるのさえ聞えるようで。……それがために身を恥じて、皆の床の世話もしなかった。極きまりの悪い、蚊帳せいの所せ為いばかりではないと言います。夜の進むに従つて、私たちの一挙一動がよく知れた。……

三人が一ひと寝入ねいりしたでしょう、うとうととして一度目を覚ます、その時でした。妹の方が、電燈を手繰たぐつて隣の室へ運んでいたのは。——（大変な虫ですよ）と姉は寝ながら懶ものうそうに団扇うちわを動かす。蚤のみと蚊で……私も痒かゆい。身体中からだじゆう、くわツといきつて、堪たまらない、と蚊帳とびだを飛出して、電燈の行ったお隣へ両腕まくを捲つて、むずむず搔かきながら、うっかり入ると、したたかなものを見ました。頭から足のさきまで、とろりと白い膏あぶらのかかったはり切れそうな膚はだなんです。蚤ふるを振ふるつて脱いでいたので。……電燈の下へ立派に立つて、アハと笑いました。（抱くと怪我をしてよ。……夏虫さん——）（いや、どうも、弱よつた。）と襖あいにくの陰へ、晩に押し置いて置いた卓子台ちゃぶだいの前へ、くったりと小さくなる。（生憎あいにく、薬が

。と姉が言うと（香水をつけて上げましょう、かゆいのが直るわよ。……）と一気にその膚で押して出て、（どうせお目に掛けたんだ、暑さ^{しの}凌ぎ。ほほほほ。）袋戸棚から探つて取つた小罫を持って、胸の乳、薰^{かお}つてひつたりと、（これ、ここも、ここも、ここも。）虫のあとへ、ひやひやと罫の口で接吻^{キッス}をさせた。

ああ、この時は弱つたそうです。……由紀は仏間に一人、蚊帳に起きて端正^{きちん}と坐つて、そして目をつぶつて、さきから俯向いて一人居たのだそうですが、二階の暗がりには、その有様が、下の奥から、歴々^{ありあり}と透いて見えたのですから。——年は長^たけても処女なんです。どうしていいか分らない。あつちへ遁^にげ、此方^{こち}へ避け、ただ人の居ない処を、壁に、柱に、袖をふせて、顔をかくしたと言うじやありませんか。

私は冷い汗を流した、汗と一^{いっしょ}所に掌^{てのひら}に血が浸^{にじ}んだ。——帯も髪も乱れながら、両膝を緊^{しつかり}乎^{ゆわ}結えている由紀を、板の間に抱いたまま、手を離そうにも、頭^{かぶり}をふり、頭を掉^ふつて、目を結えたのをはずしませんから、見くびつて、したたかくい込んでいた蚊の奴が、血をふいてぼとりと落ちたのです。

私は冷くなつて恥じました。けれども、その妹も、並んだ姉も、ただの女、ただの芸妓

に、私が扱ひ得なかつたことは、お察し下さるだろうと存じます。

——痒かゆさは、香水で立たちどころ処ところに去りましたが、息が詰つまる、余り暑いから、立たつて雨戸を一枚繰くりました。(おお涼しい。)勢いきおいに乗じて、妹は縁の真正面へ、蚊帳の黒雲を分けたように、乳を白く立たつたのですが、ごろごろごろ、がたん。間遠まどおに荷車の音が、深夜の寂せ寞ぼくを破やぶつたので、ハツとかくれて、籐椅子とういすに涼すずんだ私の蔭かげに立ちました。この音は妙せうに凄せううございしました。片輪車かたわぐるまの变化へんげが通とるようで、そのがたと門かどにすれた時は、鬼おにが乗の込こむ氣勢けいせいがしました。

姉あねがうつとりした声で、(ああ、私は睡ねむい。……お寝よ、いいからさ。) (沢山たんとおつしやいよ。)余り夜が深い。何なにだか、美しい化鳥けちようと化鳥けちようが囁ささいているように聞きえた。(あ、梟ふくろうが鳴ないでいる。)唯一ただひとつつ、遙はるかに、先刻さつぎの山の、時雨しぐれの松まつのあたりで聞きえました。

この、梟ふくろうが鳴なき、荷車かしゃの消きえて行く音を聞きいた時、由紀ゆきは、その車くるまについて、戸外おもてへ出でて、屹きつと自殺じくつをするに違ちがいない。……それが可恐おそろしい。由紀ゆきはまだ死しにたくない未練みれんがあ

と思つたそうです。——真個まっこうです、その時戸を出たらば魔まに奪とられたに相違ありません。
 私たちも凄すごかった。——岬すも、洲すも、瀉すも、山も、峰の松も、名所一つずつ一ヶ所一体
 の魔りようが領りようしているように見えたのですから。（天狗様でしょうか、鬼でしょうか、私わたいたち
 とはお宗旨違ちがいだわね。引込ひっこみましよう可こ恐おいから。）居ゐかかつて私の膝ひざにうしろ向きに
 かけていた銀杏いちょうがえし返かへが言いつたのです。

由紀は残のこらず知しつていました。

それからは、私も余よつほど程ほど寝ね苦くしかつたと見みえます——先まにお話はなしした二度めに目を覚さま
 しますまで、もの一時間とはなかつたそうで——由紀の下階したから透とおして見たのでは——
 余はつきりり判はつきり明あ見えるので、由紀は自分で恐おそろしくなつて、これは発狂はつするのではないかと思
 った。それとも、唯、心で見みる迷まいで、大蚊帳なの裡なかの模な様やは實際じつじとまるで違ちがつてゐるかも
 知しれない。それならば、まよいだけで、氣きが違ちがうのではないであらう。どつちか確たしかめるの
 は、自分で一度二階へ上あつて様子を見なければ分わらない。が深く堅かく目を瞑つぶつてゐると思
 いつつ……それが病氣びやうきで、真個ほんとうは薄目はくめを明あけているのかも計はかられない、と、身みだしなみ

を、恥かしくないまでに、坐つてカタカタと箆筒をあけて、きものを着かえて、それから
 手拭てぬぐいで目を結ゆわえて、二階へ上つたのだそうですが、数ある段を、一歩ひとあしも誤らず、す
 すらと上りながら、気が咎とがめて、二三度下りたり、上つたり、……また幾度いくたび、手で探つ
 ても、三重みえにも折つた手拭はちやんと顔半分蔽おほうている。……いよいよ蚊帳を覗くと
 と、余りの事に、それがこの病氣の峠で、どんな風に、ひきつけるか、氣を失うか、倒れ
 るかも分らない。その時醜みにくくないようにと、両膝をくくつたから、くくつたままで、蚊帳
 まで寄つて来るのです、間あいだは近いけれども、それでは忍んでは歩行あるけますまい。……扱しぎ帯
 を繫つないで、それに縫すがつて、道成寺どうじょうじのつくりもののように、ふらふらと幽霊だちに、爪立つまだ
 った釣身つりみになつて覗いたのだそうです。私に追われて、あれと遁にげる時、——ただたより
 だつたのですから、その扱しぎ帯を引手練ひきたぐつて、飛退とびのこうとしたはずみに、腰が宙に浮きまし
 た。

浅間あさましい、……極きまりが悪い。……由紀は、いまは生きていられない。——こうしていても、
 貴方あなた（とはじめて顔を振向けて、）私の抱だいでいる顔も手も皆見える。これが私を殺すので
 す——と云つて、置おき処ところのなさそうな顔を背ける。猿轡さるぐつわとか云うものより見ても可あ
 哀われなその面縛めんばくした罪のありさまに、

(心配なざる事はない。私が見えないようにして上げる。)

と云つて、目隠めかくしの上を二一処ふたところ吸つて吸いました。

貴下あなた、慰めるにしても、気休めを言うにしても、何と云う、馬鹿な、可いまわ忌しい、呪のろつた事を云つたものでしょう。

手拭は取れました。

(あれ、お二方ふたかたが。)

と俯向く処を、今度はまともに睫毛まつげを吸つた。——そのお二方ですが、由紀が、唯はげ憚かつたばかりではなかつたので。すらすらと表二階の縁の端はしへ、歴ありあり々と、円鬚まるまげと銀杏いちよう返がえしの顔が白く、目をぱつちりと並んで出ました。由紀を抱きかくしながら踞うずくまつて見た時、銀杏返の方が莞爾にっこりすると、円鬚うなずきのが、頷うなずきを含んで眉を伏せた、ト顔も消えて、衣きものばかり、昼間見た風の羅うすものになつて、スーツと、肩をかさねて、階はしご子段だんへ沈み、しずみ、トントンと音がしました。

二人のその婦おんなの姿は、いつも用が済むと、何処かへ行つて了しまうのが例なのです。

しかし、姉も妹も、すやすやと蚊帳に寝ていた事は言うまでもありません。

ただ不思議な事は、東京へ帰りましてからも、その後時々逢いますが、勝手々々で、一

人だつたり、三人だつたり、姉と妹と二人揃つて立つた場合に会わなかつたのでござい
ます。

——少々金の都合も出来ました。いよいよ決心をして先月……十月……再び水戸屋を訪
ねました時、自動車タキシイが杜戸もりと、大くずれ、秋谷を越えて、傍道わきみちへかかる。……あすこだつ
たと思う、紅蓮こうれんが一茎ひとえだ、白蓮華びやくれんげの咲いた枯田かれたのへりに、何の草か、幻の露の秋草の
畦あぜを前にして、崖の大巖おおいわに抱かれたように、巖窟いわむろに籠こもつたように、悄しよんぼり乎ひとりと一人、
淡たなすくおんなんだ婦を見ました。

(やあ、水戸屋の姉さんが。)

と運転手が言いました。

ひらりと下りますと、

(旦那様——)

知らせもしないのに、今日来るのを知つて、出迎でむかえに出たと云つて、手に縫すがつて、あつ
い涙で泣きました。今度は、清すずしい目を睜ひらいても、露あふのみ溢れて、私の顔は見えない。……
由紀は、急な眼病で、目が見えなくなりました。

——結婚はまだしませんが、所帯万事引受ひきうけて、心ばかりは、なぐさめの保養に出まし

た。——途中から、御厚情を頂きます。

……ああ、帰つて来ました。……御令閨ごれいけいが手をお取り下さつて、

と廊下を見つつ涙ぐんで。

「髪も、化粧も、為して頂いて……あの、きれいな、美しい、あわれな……嬉しそうな。」

と言いかけて、無邪気に、握にぎりこぶし拳こぶしで目をおさ圧おさえて、渠かれは落らく涙るいしたのである。

涙はともに誘われた。が、聞えるスリツパの蹙あしおと音おとにも、そのふたりおんな（二人の婦）にも、著者

に取つては、何の不思議も、奇蹟ほんも殆どんど神秘らしい思いでないのが、ものたりない。：

：

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

初出：「女性」

1925（大正14）年1月号

※「捲える」に対するルビの「こしら」と「あつら」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「甲《きのえ》乙《きのと》」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年8月25日作成

2017年9月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

甲乙 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>